



編集発行
群馬大学医学部同窓会

発行責任者 飯野 佑一
編集責任者 福田 利夫
〒371-8511
前橋市昭和町三丁目39-22
電話027-220-7861(ダイヤルイン)
FAX(電話兼用)027-235-1470

刀城クラブホームページ <http://tojowww.dept.med.gunma-u.ac.jp/> 同窓会事務局メールアドレス tojoclub@ml.gunma-u.ac.jp

入学おめでとう



平成29年度群馬大学医学部医学科新入生歓迎会（平成29年4月8日 刀城会館）

目次

入学おめでとうございます	クリニックおくでら 院長 奥寺 崇 …… 8
同窓会長 飯野 佑一 …… 2	平成29年度前橋支部総会のご案内
入学オリエンテーション	前橋支部長 山田 邦子 …… 8
学友会執行委員長 桑原 幸佑 …… 3	医療人能力開発センターだより⑩
平成29年度新入生・医学科学士編入生名簿 …… 4	センター長 大嶋 清宏 …… 9
母校に望む⑥	財団のページ …… 10～11
聖隷横浜病院 院長 林 泰広 …… 5	役員会だより …… 12
水芭蕉⑤③	学内人事 …… 12
千葉県がんセンター臨床試験推進部	叙勲 …… 12
主任医長 三梨 桂子 …… 6	謹告 …… 12
学会報告	編集後記 …… 12
産科婦人科学 教授 峯岸 敬 …… 7	
腫瘍放射線学 教授 中野 隆史 …… 7	

入学おめでとうございます

歴史の重みをかみしめて
親睦と連携を

医学部同窓会・刀城クラブ

会長 飯野 佑一 (昭46卒)



新入生の皆さんご入学おめでとうございます。同窓会・刀城クラブへの入会を心より歓迎いたします。当然のことですが、同窓会は皆さんのために、そして我々同窓会員のためにあるのです。同窓会の発展は皆さんの肩にかかっているのです。ここで、同窓会・刀城クラブ設立の経緯と役割について簡単に紹介いたします。

昭和27(1952)年正式に同窓会が設立され、刀城クラブ同窓会と命名されました。刀城の刀は利根川の刀(利)、刀圭{本来は薬を盛る匙(さじ)のこと、転じて医術を表す}に通じます。城は赤城山の城、仲間の城郭更に学問の城郭を表します。母校の西側を流れる坂東太郎利根川、北方にそびえる赤城山、周囲の景観を含めていかに当時の先輩方が母校を大切に思っていたかがわかります。卒業後も会員相互の親睦を図り連携を強めてゆきたいとの熱い思いがあったのです。今年で同窓会・刀城クラブ創設65周年

になります。建物はすべて新しくなりましたが、先輩方が残して下さった昭和キャンパス内の木々の一つ一つに当時の香りと歴史の重みを感じられます。

ここで同窓会・刀城クラブの目的及び事業について紹介いたします。会則の第3条には、本会は会員相互の親睦と研修を図るとともに、群馬大学医学部の発展に寄与し、併せて学術研究の向上に貢献する事を目的とするとあります。また4条には、本会は前条の目的を達成するために、次の各号に掲げる事業を行い、広く社会に貢献する。(1) 会員相互の親睦と発展に関する事業(2) 会報、会員名簿の作成(3) 講演会、研究会等の開催(4) 表彰、奨学・補助金制度の実施(5) その他役員会で必要と認めた事業とあります。これらに沿って同窓会は活動しています。学生の皆さんに対しては、学友会や部活への援助、医学祭への補助、医科学生同士の国際交流への支援、学生の表彰などの活動をしています。

皆さんには群馬大学医学部があり、同窓会・刀城クラブが控えています。それが皆さんにとって財産であります。どうぞ、多くの先輩方が築きあげてこられた歴史の重みをかみしめ、会員相互の連携を密にして同窓会・刀城クラブを共に発展させて行こうではありませんか。皆さんが個性豊かな人間として、気骨のある人間としてたくましく成長されますことを強く願っております。同窓会・刀城クラブ入会おめでとうございます。



新入生歓迎会 (平成29年4月8日 刀城会館)

入学オリエンテーション

新 入 生 歓 迎

学友会執行委員長

桑原 幸佑 (医学科4年)



学友会執行委員長を務めさせていただいております。医学科4年の桑原幸佑と申します。刀城クラブの先生方のご厚意により、本年も新入生歓迎会が執り行われましたことを、学友会より感謝申し上げます。

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。入学して早々、皆さんは入学式、医学部オリエンテーション、同窓会オリエンテーション、ゆうすげと怒濤の一週間を過ごされたことでしょうか。新しい環境の中で、これからの学生生活に対して大きな期待と不安を抱いていることと思います。これから皆さんが過ごす医学部での6年間は長いようであつという間に過ぎてしまいます。医学部での6年間で充実したものになるかどうかは皆さん次第です。

大学での生活は高校までと比べてはるかに自由で、自分で選択することが多くなります。例えば、医学の勉強に関しても、授業だけでなく様々な勉強会やシンポジウム・学会に参加することで、自分の興味のある分野の見識をより深めることができます。部活動やサークル活動も多彩で、自分のやりたい活動に打ち込むことができます。また、群馬大学

には、MD-PhDコースという学部生の頃から医学研究を経験できる制度が整っており、研究に興味のある人はMD-PhDコースに参加してみるのも良いでしょう。是非、視野を広く持ってさまざまなことに挑戦し、皆さんの可能性を試してみてください。

しかし、そうした学生生活の中で、カリキュラムや学習環境に改善の余地を感じることもあるでしょう。そうした意見を汲み取り大学側に伝えるのが「学友会」です。学友会は、医学科の全学生が加盟する自治組織であり、その主な役割は大学・同窓会と学生との“橋渡し”です。例えば、年2回行われる「懇談会」では、先生方と学生がカリキュラムや大学施設など、学生生活全般について意見交換を行っています。一人一人の声は小さくても、多くの意見を集約し、学生の総意として大学側に伝えていくことで、これまで多くの要望が実現してきました。大学では学生が主体となって働きかけることで、多くのことを変えていくことができるのです。そのためには多くの意見が必要です。アンケートやネット目安箱を通じて、多くの意見をお寄せ頂けたらと思います。

最後になりましたが、同窓会の皆様には様々な面で学生へご支援をいただき、大変感謝しております。そして、われわれ学友会がこのように活動を継続することができるのは、教授をはじめとする先生方や大学関係者の皆様が学生の声に耳を傾けて下さっているからに違いありません。今後とも、暖かいご支援・ご協力のほどよろしくお願いいたします。



質問する新入生

母校に望む ⑥1

良医を育成する 組織風土の醸成

聖隷横浜病院

院長 林 泰広 (昭60卒)



私は1985年に群大卒業後、郷里の静岡県で耳鼻咽喉科・頭頸部外科医として歩んできました。1991年から聖隷浜松病院という地域の中核病院に勤務し、その後思いもかけず24年を過ごしました。同院では臨床のみならず安全管理、感染管理、医療倫理など様々な管理業務に携わり、JCI (Joint Commission International) 認証取得も経験しました。2015年1月からは聖隷横浜病院へ院長として赴任し今日に至っています。当院は横浜市中心部の近傍に位置する300床の急性期病院です。職員は約600名、医師70名で、臨床研修指定病院として全国から群大卒業生も含めた初期研修医12名が集っています。神奈川県には刀城クラブの先生方が数多くご活躍ですので大変に心強く感じます。以下僭越ですが群大を離れた勤務医として母校に望みたいことを記します。

ここ数年母校が芳しくない話題でマスコミを賑わせてきたことを誠に残念に思ってきました。外科の医療事故のその後につきましては、大学のホームページで、再発防止の提言にもとづき群大病院の組織的安全管理体制の改革に関するルールが細かく策定され、すでに成果も重ねているとのご報告を拝見しました。大変に望ましい状態で今後の進捗を期待したいと思います。

ただし私のつたない経験から老婆心で申し上げますが、難しいのはルール遵守の継続とクリニカルガバナンスの確立です。事故の経験メンバーが残っているうちはルールの策定から実施までは力技で何とかもっていけますが、のど元過ぎると、ルール制定の理由は次第に忘れ去られ、ルールをこなすことだけが目的化してしまいます。「インフォームド・コンセントとは、予想される危険について列挙した難しい文書へ患者がサインする儀式だ」などの揶揄も生じるわけです。ルール策定の目的はあくまで患者を守ることです。“仏作って魂入れず”ということになりませんよう、管理側の方々だけでなく職員全体で仕組みを育てていただきたいと思います。と

は言え、患者安全の組織風土作りは安全管理担当者にとって最もやっかいな業務です。ルールを変えたくらいで長年染みついた雰囲気は変わりません。組織風土の変革には牽引のためのエンジンが必要です(もうひとつの難題のクリニカルガバナンスの確立については紙幅の都合で割愛します)。

群大医学部医学科の入学受入方針(アドミッション・ポリシー)を拝見しますと、『医師としてふさわしい人格と倫理性、コミュニケーション能力、人間に対する豊かな感受性と奉仕の精神を備えている人』が選択基準となっています。さらに入学後には、『医師としての倫理観・責任感及びチームのリーダーとしてふさわしい人格を身に付けさせる教育』を行うとあります。個々人の倫理観は患者安全の核のひとつです。このような教育を身に付けた医師ばかりであれば院長の苦労は相当減ることでしょうし組織風土も変わるでしょう。

しかし現実には、条件を満たして選ばれし学生たちも、いざ入学すると、膨大な医学知識の洪水にさまよい、先輩医師の多忙な生活に戸惑い、眼前には進級試験、国家試験が立ちはだかります。そんな状況の前には本来持っていた倫理的感受性など二次に押しやられかねません。

隠れたカリキュラム(潜在的カリキュラム、hidden curriculum)という教育社会学用語があります。意図された正規カリキュラムではなく、学生が教師や仲間たちとの経験を通して知識、行動様式、メンタリティなどを暗黙的に身につけていくというものです。安全管理や医療倫理への関心、また他人への共感、持続的な能力向上への姿勢、自律の尊重など医師としての資質は、正規カリキュラムでの講義もさることながら、むしろ先輩や同僚から学ぶhidden curriculumの役割が重要だと感じます。

本稿で私が群大の教員の皆様へお願いしたいことは、ご自分が学生(や研修医)と共に過ごす際の言動には大きな役割があると強く認識していただきたい、そのうえで自らを律して良き手本となっていたいただきたい、そして彼らを叱咤激励、指導を続けていただきたいということです。とくに教授の先生方には率先して組織風土を変えるエンジンの役割を担っていただき、未来の素晴らしい良医を育成する教育者としての責任を果たしていただければと念じます。ピンチをチャンスに捲土重来を期待いたしております。



女性医師シリーズ ⑤3

卒後20年を過ぎて

千葉県がんセンター臨床試験推進部
主任医長 三梨 桂子 (平7卒)

気付いてみると、平成7年の卒業から20年以上を経過していました。まだまだ修行中と思っていたのが、実はもう仕事も人生も折り返しを過ぎていることに愕然とするこの頃です。

大学卒業前に、診療科を絞り込めずに入局先を決定しかね、卒後は郷里（秋田県横手市）の総合病院で2年の内科研修を行いました。研修医後半で早期癌に対する内視鏡切除の華やかさに惹かれたことと、遠隔転移を有する進行癌患者さんに対して打つ手がないという無力さを実感し、消化器内科へ進むことを決め、出戻りの第一内科（現・病態制御内科学）へ入局しました。初めの派遣先は、国立療養所栗生楽泉園と西群馬病院（現・国立病院機構渋川医療センター）の併任で、前半の半年間は一泊二日で草津の楽泉園へ行き、残り三日を西群馬で肝臓疾患をメインに診療を行い、腹部エコーや血管造影などを教えていただきました。ハンセン氏病は学生時代に見学に行ったくらいしか知識もありませんでしたが、楽泉園の穏やかな患者さん達の診療をして、夜は草津の湯に入れる勤務を楽しく過ごしました。後半の半年間は呼吸器内科ヘローテーションし、肺がんの他、結核診療についても学びました。翌年は、上武呼吸器科病院へ派遣となり、消化器内科としての業務の他、アレルギー、気管支喘息の患者さんを多数診る機会に恵まれました。

5年目からは、大学病院の非常勤となり、上部消化管疾患の希望から内圧グループへ所属し、草野元康先生、河村修先生に非常にお世話になりました。食道や胃の内視鏡検査や治療、消化管機能障害に対する内圧検査や処置をする中で、時に進行癌の患者さんを診ることもありました。外科へ紹介するも手術適応がなかったり、緩和的医療が必要になる方をみて、消化管癌に対する化学療法を勉強したいという気持ちが強くなり、当時の森昌朋教授と草野先生

にお願いし、国立がん研究センターのがん専門修練医へ応募、国内留学という形で出ささせていただきました。

平成14年6月、期待と緊張を持って国立がん研究センター東病院（柏市）での生活が始まりました。指導医は現院長である大津敦先生でしたが、大津先生を始めスタッフは診療のみならず、研究、開発や医療行政的な部分においても国内をリードしており、その視線は世界に向いていました。若手はレジデントや修練医の他、任意研修や短期研修（無給）として熱意を持ったドクターが全国から集まっていました。厳しい世界に来てしまったことに改めて気付き、慌ててガイドラインや取り扱い規約を読むことから勉強を始め、1日が24時間では足りない毎日でした。修練医の期間は2年間でしたが、卒業時にまだ国がんで学びたいと思い、そのまま東病院で非常勤として勤務させていただくことにしました。当初は「化学療法」を中心としていくことを予定していましたが、諸般の関係から「内視鏡」メインに従事することとなり、その後の非常勤、常勤合わせて7年間は食道がんを中心に診療と研究を続けました。しかしこの間は、がんセンターのスタッフとして開発や研究を常に進めなくてはいけないという重圧もあり、正直なところあまりQOLは良くなかったかと思いますが、非常に楽しく充実して仕事をした期間でした。

40歳になり、このまま国がんで続けるかどうか考え始めていたとき、現施設のDrより声をかけていただき、平成23年から千葉県がんセンターに就職しました。ちょうど異動を決めた後で妊娠が判明し、移動後早々に産休・育休で半年休み、その1年後に第2子の誕生でまた半年お休みをいただきました。高齢出産でしたが、幸い経過中に大きな問題はなく、産後は家族とヘルパーさんの協力を得てなんとかこなすことができました。今は保育園への送り迎えや急なお迎えの連絡に対応しながら、消化管の化学療法を中心とした診療と、治験や臨床試験を院内で進めるための調整等の業務を続けております。

このたび同窓会報への寄稿のご連絡をいただき、これからの将来をどうしようか考えている女子医学生の方、女医さんのロールモデルになれる点はあまりなくて申し訳ありません（特に、40代での出産育児はあまりお勧めしません。妊孕力も、育児における自分の体力も落ちていきますし、両親の手も借りづらくなります）。大学院への進学も留学もなかったこの20年でしたが、そのときそのときで自分のやりたいことを考え、それを実現できる方向へ動いてこられたことに満足しており、これまで各施設で指導いただいた上司に感謝いたします。

学会報告 (同窓会補助)

第26回臨床内分泌代謝
Update産科婦人科学
教授 峯岸 敬 (昭52卒)

11月18日(金)・19日(土)に、大宮ソニックシティにて開催されました第26回臨床内分泌代謝Updateにおきまして、格別のご高配を賜り、誠にありがとうございました。

臨床内分泌代謝学は、診断、治療のいずれの分野でも、ますます急速に進歩してきています。臨床内分泌代謝Updateは、学術総会との内容の重複や競合を避け、それぞれが学会として整合性ある分担した機能を発揮できるよう十分に留意しつつ内分泌代謝科専門医の実地臨床の知識を補完することを主目的とし、併せて実地医家に対し、内分泌代謝臨床の最近の知識を解説、提供する事を目的としています。

また、本学術集会では、本分野において疾患における新たな治療法、新規の遺伝子異常の発見、治療の合併症の理解などについて多くの演題をいただきました。

市民公開講座は、女性の健康管理を念頭に企画いたしました。妊娠が、女性個人からみると大きな負荷がかかる期間であり、その期間に妊娠糖尿病や高血圧状態を発症することがあります。また、妊娠の負荷が除かれると、その症状は消失するのが普通ですので注意が払われなくなります。このため、将来の生活習慣病の予測や予防の観点はあまり重要視されませんでした。しかし、個人として妊娠中のホメオスタシスの負荷に対する反応を注意深く記録し観察することで、その後の女性が中高年以降に、注意すべき疾病とこれに対する予防に重要な情報をもたらす可能性があります。

今回の指定演題では、これら内分泌・代謝を軸とした多領域にわたる疾患をそれぞれ異なった診療科での最新の診断・治療について討論をすることで、それぞれの診療科の機能を高める効果を期待しました。

会期中には、約1,300名以上の方にご参加いただき、盛会のうちに無事終了することができました。これもひとえに皆様のあたたかいご指導とお力添えの賜物と深く感謝いたしております。

学会報告 (同窓会補助)

第7回国際放射線神経
生物学会を開催して腫瘍放射線学
教授 中野 隆史 (昭54卒)

このたび、平成29年2月9日(木)～10日(金)第7回国際放射線神経生物学会を、新潟県越後湯沢のホテル双葉にて、大会長として開催させていただきました。雪深い越後湯沢での開催でしたが、参加者は約100名と過去最大規模となり、非常に熱気のある会となりました。放射線腫瘍医、脳外科医、神経生物学者、放射線生物学者が一同に会して、基礎から臨床まで、幅広い議論の場を提供できたと思っております。関係者の皆様におかれましては多大なご協力をいただき、大変ありがとうございました。

この国際放射線神経生物学会は2011年に神経薬理学分野の白尾智明教授(現学会理事長)と共に「放射線神経生物学領域において、臨床と基礎との架け橋となる学会を作る」というコンセプトで設立しました。年に1回の学術大会もはや今年で7年目となり、学会基盤も確立し、研究のさらなる深化が感じられる学会となりました。

今大会は白井克幸講師と高橋昭久教授に企画運営をお願いしました。プログラムは臨床から基礎研究まで、幅広い領域にかけて、国内外の著名な研究者からご講演をいただきました。特に海外からは4名の先生方、Penny Jeggo教授(University of Sussex)、Roman Vlkolinsky教授(Loma Linda University)、Charles Limoli教授(University of California)、Kathryn Held教授(MGH/Harvard Medical School)をお招きし、最先端の講演を設定できました。今学会の開催を通して、放射線神経生物学の今後のさらなる発展に貢献できたと考えております。

最後ではありますが、群馬大学医学部同窓会からご支援をいただき、研究会を無事に終了できたことを、心より感謝いたします。

学会報告（同窓会補助）

日本精神分析的精神医学会 第15回大会 開催記

クリニックおくでら

院長 奥寺 崇(昭60卒)



平成29年4月21日から23日までの3日間、昭和大学医学部付属看護学校において日本精神分析的精神医学会第15回大会が開催され、大会実行委員長を務めさせていただきました。操作的診断基準、治療ガイドラインに傾きがちな現在の精神医学において、本学会は、精神病理と発達論、治療技法とを結んで話すこと・言葉を交わすことに主眼を置いた精神分析を医療実践の場においてどのように展開するかに主眼を置いています。演題は発表30分討論30分、症例検討は3時間と、討論に時間をとった構成にもその特徴が表れています。

今回は私の英国留学時代にtutorとして大変お世話になった元英国精神分析協会会長のDavid Bell先生をお招きして、症例検討、理論ワークショップとともに特別講演では『パラノイア—現在社会におけ

るその意味—』をご発表いただきました。精神分析における現代クライン派の論客であるとともに、精神科医・精神分析家になる前にはアフリカで医療に携わっていたという経歴からもうかがわれる先生の情熱は、講演後のシンポジウム『精神科領域での治療困難例への実践』への参加、討論も加わって会場の熱気を終始リードされました。

学会プログラムでは、昨今の専門医制度をにらんだのパネルディスカッション『精神分析的精神医学の研修と発展』、グループ討論形式にした教育研修セミナー3『長期精神分析的精神療法のエビデンス-歴史的変遷と最新知見-』といった新たな試みにおいても現実を見据えた活発な討論が行われました。

医療へのAIの導入がささやかれる現代社会において、抄録の表紙に使ったゴーギャンの『われわれはどこから来たのかわれわれは何者かわれわれはどこへ行くのか』をモチーフに、存分に感じ、思いを巡らし、考え、語り合える機会を提供できたのではないかと思います。

この場を借りてご支援いただきました同窓会に深く御礼申し上げます。

平成29年度前橋支部総会のご案内

前橋支部長 山田 邦子(昭44卒)



刀城クラブ60周年の記念植樹「紅しだれ桜」の新緑が、一回り大きくなって医学部正門前に輝いております。附属病院前の銀杏並木もずっしりと葉をつけました。

地元前橋支部から総会のお知らせです。多数のご参加を期待しております。

記

日 時	平成29年7月12日(水)
場 所	群大医学部臨床大講堂
総 会	18:15~18:30
講 演 会	18:30~19:30
講 師	群馬大学大学院医学系研究科救急医学分野 教授 群馬大学医学部附属病院救命救急センター長 大嶋 清宏 演題：群馬大学医学部附属病院救命救急センターの現状と展望
懇 親 会	病院内レストラン・チネマ 19:30~21:00
参 加 者	刀城クラブ前橋支部員、病院関係者
懇親会費	8,000円(学生は無料)

医療人能力開発センターだより⑩

センター長就任あいさつ

センター長 大嶋 清宏 (平4卒)



平成29年4月より、荒川教授の後任として群馬大学医学部附属病院医療人能力開発センター長を拝命いたしました。就任に際しまして、御挨拶とセンターの現状を申し上げます。

現在、本センターは臨床研修センター、スキルラボセンター、男女協働キャリア支援部門、地域医療支援部門（地域医療支援センター）、看護職キャリア支援部門、管理運営部門の6部門から構成され、各部署がお互いに協力し合いながらその任務を遂行しています。また、卒前・卒後の一貫した教育体制維持、さらにそれによる良医の育成と充実した地域医療の実現を目指して、医学教育センターとも連携して運営を行っております。

臨床研修センターは、菊地麻美講師が副センター長として継続して尽力してくださっています。当センターでは、菊地先生を中心として初期臨床研修医および後期研修医の方々に対しきめ細やかな対応を行っております。より多くの研修医獲得を目指して、「レジナビフェアin東京」や「群馬県臨床研修病院合同ガイダンスin群大キャンパス」等に参加し学内外の学生に対して熱心に説明を行っております。また、後期研修に関しては、新専門医制度への移行に対応し、多くの診療科における研修プログラムの大幅な改訂作業や研修医への調整作業等、業務が益々拡大してきております。

スキルラボセンターは、田中和美助教が中心となり整備を進めてくださっています。スキルラボは第1および第2スキルラボに分かれており、診察・検査における臨床基本手技に関するシミュレータ、さらには手術手技や急変時対応および心肺蘇生に関するシミュレータおよびトレーニングシステム等、幅広い機材が揃い、群馬県内随一の設備が整っている

と自負しております。平成28年の利用者は延べ13,138名で、平成21年の2,385名と比較して5倍以上に伸びています。学外の医療関係者も利用することができ、当センターのホームページから予約が可能です。所有する器材内容もそこから確認できますので、是非ご利用ください。

女性医師等教育・支援部門ですが、男性医師も育休や介護休暇を希望されるようになってきた背景もあり、平成28年度から「男女協働キャリア支援部門」へ改称され、またこれに合わせて、これまで提供してきた支援策である「女性医師支援プログラム」は「医師ワークライフ支援プログラム」となりました。医療人能力開発センターの副センター長である永井弥生准教授が当センター長を兼任されています（永井先生は群馬大学男女共同参画推進室の副室長も兼任）。当院では上述したプログラム等による「短時間勤務」「勤務形態の緩和（当直の軽減）」などの手厚い支援策を提供しています。平成26年度からオープンした、教職員および学生の交流スペースである「まゆだま広場」は現在も好評を博しています。

地域医療支援部門（地域医療支援センター）は、群馬県との協力体制の下、羽鳥麗子講師と土岐明子助教が中心となり、地域枠学生への支援を目的としたセミナーや研修会等の企画立案と実践に取り組んでいます。また、県内高校生向けの体験学習にも多大な努力を払っています。具体的な活動としては、「高校生のための医師職場体験セミナー」「医学生のための地域医療体験セミナー」「群馬県臨床研修病院見学バスツアー」「ぐんまレジデントグランプリ」「臨床研修病院合同ガイダンス」「ぐんま地域医療リーダー養成キャリアパス」などがあり、その他、指導医養成講習会の実施、群馬県ドクターバンク事業も行っています。

地域医療の充実のためには人材確保が不可欠であり、そのためには研修環境の整備と魅力的な研修プログラムが必要です。同窓会の皆様におかれましては、医療人能力開発センターに対する引き続きのご支援・ご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

財 団 の ペ ー ジ

「肥満と疾患：

どこまで解明されたか？」

公益財団法人群馬健康医学
振興会からの刊行物の紹介

公益財団法人 群馬健康医学振興会
理事長 森川 昭廣 (昭44卒)



群馬健康医学振興会の主な事業の一つに県民の皆様
様の健康保持と疾病予防についての刊行物出版があ
ります。すでに以下の表1にお示したように5冊
の本が出版され、一般の方々向けに販売されたり、
患者団体に寄付されたりしております。一部は医学
部の学生に贈られ医学の全般を学んでいただいでお
ります。6冊目は平成28年度中に出版される予定
でしたが、諸般の事情により発刊が延期されてお
りましたが、この度、執筆者、事務局や上毛新聞社の
皆様のご努力で、近々に出版の運びとなります。そ
こで、本欄では出版に先立ってその内容等を皆様に
お知らせし、日常診療にお役立ていただきたいと思
います。

肥満は世界中で大きな問題となっていますが、ま
だまだ解明しなければならぬ問題もたくさんある

と聞いています。しかし、一方で肥満を原因とする
疾患について徐々に解明されてきました。肥満に関
連するホルモンや遺伝子、さらには肥満を治療する
方法も段々確立されてきています。今回の本は表2
に示すように肥満に関して網羅的にかつ図や表を多
用して臨床家の皆様のみならず一般の方にも十分お
役に立つように編集されました。おまとめ役の群馬
大学大学院内分泌代謝学の山田教授は、“これほど
肥満をわかりやすく日本語で解説した書は初めて
で、こんなに肥満の話は面白いものだ”と序文で書
かれておられます。表2に目次からタイトルと著者
について抜き書きしてお示しました。県民の皆様
には肥満からの脱却や予防に、学生の方々が肥満学
の勉強に、そして一般医家の先生方が日常臨床で十
分お使いになれる本が出来上がったと思っていま
す。ぜひ手に取られご自分に必要なところをお読み
になりさらにご活用ください。なお、発刊は7月下
旬ころで、書店や病院売店等で販売されます。発刊
は公益財団法人群馬健康医学振興会が、群馬大学医
学部同窓会・刀城クラブの協力の下、上毛新聞社か
ら出版されます。価格は2,000円程度です。どうぞ
よろしくお願いいたします。

表1. 過去の当会からの出版物

これまでに発刊した書籍	書 籍 名	発 刊 日
健康医学ガイド1	主治医のアドバイス	平成元年4月10日
健康医学ガイド2	わが家のドクター	平成5年7月25日
健康医学ガイド3	健康づくり百科 —からだと生活と環境—	平成8年6月20日
健康医学ガイド4	続・主治医のアドバイス —こんな時どうする?—	平成13年4月14日
健康医学ガイド5	重粒子線 切らずに治すがん治療と 医療最前線	平成22年3月31日

財 団 の ペ ー ジ

表2. 「肥満と疾患：どこまで解明されたか？」

目次	タイトル (仮題)	著者 (敬称・所属略)
	発刊に寄せて	森川 昭廣
	はじめに	山田 正信
第1章	肥満とは	
1	肥満者は増加しているか？	森 昌朋
2	肥満とは？ BMIとは？	大島 喜八
3	肥満と肥満症の違い	岡田 秀一
4	脂肪細胞と肥満	佐藤 哲郎、吉野 聡
5	内臓脂肪と皮下脂肪の違い	麻生 好正
6	末梢中枢連携と恒常性V S 報酬性摂食	矢田 俊彦
7	エネルギー代謝と肥満	北村 忠弘
第2章	肥満と疾患	
8	肥満とメタボリック症候群	中島 康代
9	肥満と糖尿病	伴野 祥一
10	肥満症と脂質異常症	犬飼 敏彦
11	肥満と高血圧	倉林 正彦
12	肥満と高尿酸血症	大山 善昭、中村 哲也
13	肥満と脂肪肝	柿崎 暁
14	肥満と睡眠時無呼吸症候群や呼吸障害	鶴巻 寛朗、久田 剛志
15	肥満と脳血管障害	朝倉 健
16	肥満と心疾患	安達 仁
17	肥満と整形外科的疾患、骨粗鬆症	高岸 憲二、内田 訓、下山 大輔、 大島 淳史
18	肥満と消化器癌	星 恒輝、草野 元康
19	肥満と月経異常	岸 裕司
20	肥満と認知症	池田 佳生
21	肥満と慢性腎臓病 (CKD)	坂入 徹、廣村 桂樹
22	肥満とサルコペニア	田澤 昌之
23	小児の肥満	大津 義晃、荒川 浩一
第3章	肥満症の治療	
24	肥満の食事療法	齊賀 桐子
25	肥満の運動療法	齋藤 従道
26	肥満症の行動療法	松本 俊一、山田 正信
27	肥満の薬物治療	山田 英二郎
28	肥満・糖尿病に対する外科治療	笠間 和典、関 洋介
第4章	肥満研究最前線	
29	肥満は遺伝か？	橋本 貢士
30	肥満の原因遺伝子はどこまでわかったか？	土屋 天文
31	肥満と報酬系	下村 健寿
32	脂肪細胞の最前線	登丸 琢也
33	摂食調節メカニズム研究の最前線	佐々木 努

役員会だより

第4回役員会 (平成29年4月27日)

出席者 飯野会長 他20名

報告事項

1. 法人のその後の活動について
2. 平成29年度新入生オリエンテーションについて
3. 桐生支部総会について
4. その他

協議事項

1. 第64回北関東医学会総会同窓会推薦講演について
2. 学術集会補助金について
3. 会報編集状況について
4. その他

第5回役員会 (平成29年5月25日)

出席者 飯野会長 他21名

報告事項

1. 法人のその後の活動について
2. その他

協議事項

1. 平成29年度同窓会総会と全国支部長・支部代表者会議の日程について
2. 平成28年度地域医療貢献賞実施要項(案)について
3. 学術集会補助金について
4. 会報編集状況について
5. その他



【昇任】

平成28年12月1日

坂倉 浩一(平成11卒) 医学部附属病院耳鼻咽喉科講師

常川 勝彦(平成11卒) 医学部附属病院検査部講師

平成29年4月1日

伊古田 勇人(平成12卒) 大学院医学系研究科病態病理学分野准教授

平成29年5月1日

戸所 大輔(平成9卒) 大学院医学系研究科眼科学分野准教授

松本 英孝(平成13卒) 医学部附属病院眼科講師

【採用】

平成29年4月1日

麻生 知寿(平成9卒) 大学院医学系研究科麻酔神経科学分野講師

叙 勲

旭日双光章 月岡 闕夫先生(昭和40年卒)

瑞宝双光章 永島 勇先生(昭和33年卒)

” 吉野 昭男先生(昭和40年卒)

” 青木 秀夫先生(昭和46年卒)

謹 告

ご逝去の報が同窓会事務局に入りました。
ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

正会員

昭和56年卒 高橋 仁公先生(平成28年10月6日逝去)

昭和26年卒 茂木 武先生(平成28年11月17日逝去)

昭和31年卒 中村 勝行先生(平成28年12月4日逝去)

昭和55年卒 阿部 光永先生(平成28年12月20日逝去)

昭和30年卒 齊藤 昭三先生(平成29年1月3日逝去)

昭和34年卒 村上 博先生(平成29年4月4日逝去)

昭和40年卒 羽生 育雄先生(平成29年4月25日逝去)

昭和37年卒 北澤 眞爾先生(平成29年5月15日逝去)

編集後記

新入生を迎えた昭和キャンパスの華やかな春が過ぎ、いつの間にか風薫る季節となりました。月日が過ぎ行くスピードが年ごとに増していくようだ、という先輩方のお話を、最近まさしく実感する日々です。卒業後20数年がたち、いつの間にか、病棟ではスタッフがタブレット型のカルテ端末で情報を交換し、患者さんの病変部位が3D画像で立体構築される時代となりました。先日は、卒業後はじめて、医学科5年生に同行して群馬リハビリテーション病院を見学させていただきました。IT技術やロボット工学を駆使した最先端のリハビリ補助装置の数々に、学生以上に感動いたしました。次の20年間で医学・医療がどのような方向に発展していくのか、おそらくどなたも、正確には予測することはできないのではないかと存じます。

そのような中ではありますが、人との出会い、特に師と仰ぐことのできる人との出会いは、医学・医療の学び手、担い手である医師にとって、時代を超えて、変わらず重要であるのではないかと感じております。同じように、ともに学び、集う同級生、先輩、後輩、同僚など、仲間との出会いもまた、かけがえのない大切なものであることと存じます。出会いとつながりの織りなす様々な情報を会員の皆様にお届けすることで、同窓会報が皆様に少しでもお役に立てていただけますように、編集委員の一人として今後とも努めて参りたいと考えております。ご指導の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。(菊地 麻美)

編集委員

福田利夫(昭51卒)、平戸政史(昭53卒)、藤田欣一(昭56卒)、安部由美子(昭57卒)、大山良雄(昭63卒)、菊地麻美(平7卒)、星野綾美(平13卒)、稲葉美夏(5年)、正古慧子(5年)、吉濱れい(5年)、高橋慶一郎(4年)、板垣由宇也(3年)、成瀬豊(事務局)、清水ちとせ(事務局)